

50. 不整脈, 高血圧を伴える巨大卵巣嚢腫, 子宮筋腫

霜 一 義, 東 公,
堀 敬 明, 王 真 麗

患者は 61 才, 未経産婦, 既往歴に特記すべきことなし, 40 才の時某医より子宮筋腫ありといわれた。49 才閉経。

昭和 37 年 9 月 2 日初診

下腹部は膨隆, 双手診にて超人頭大の腫瘤を触知す。

10 月 12 日入院, 身長 148 cm, 体重 52 kg, 血圧 200~120, 脈搏 80, 不整脈あり, E. K. G. にて VEs がみられた。

セルパルン, アプレゾリン, パルマニル, エンドレクスを経口投与し降圧, 冠拡張を図り, 血圧 140~90, 不整脈の消失を見て 11 月 1 日開腹手術を行った。

超人頭大の下腹部腫瘤は左側卵巣嚢腫にして内容量は 7500 cc。また拇指頭大の核 4 個を有する超手拳大の子宮筋腫があり, 両側附属器と共に子宮体部を剔出した。

術後経過良好にて 11 月 20 日退院した。

51. Contol, Alinamin F による自律神経症の臨床治験

村 瀬 靖, 飯島日出男

当科外来患者で成熟期の去勢後自律神経症, 更年期自律神経症併せて 32 例に, Contol, Alinamin F を用い治療効果を観察した。Contol は広範囲トランキライザーで主成分は Chlordiazepoxide (7-Chloro-2-methylamino-5-phenyl-3H-1,4-benzodiazepin 4-oxide) である。初診時の症状数順位は高いものから述べると, 肩凝り, 疲労, しびれ感, 帯下, 頭重・頭痛感, 腰痛, 眩暈, 四肢冷感, 発汗亢進……の順になる。治療中の経過観察には Kupperman の menopausal Index を算出使用した。Contol は全例に 1 日量 30 mg を 7~30 日間投与。Alinamin F は 75~100 mg を 1 日量とし 5~20 日間肩凝り, しびれ感, 腰痛等を訴える患者 10 例に使用し治療効果を認めた。投与前後の Index 変化は Contol 投与のみでは 9→2, 12→3, 16→8, 8→6, 6→5, 19→6, …。Alinamin 併用例では 10→2, 10→4, 25→20, …。Contol, Bothermon 5 mg 併用例では 20→8。Contol, Ovahormon 5 mg 併用例では 8→6。等であつた。なお上記 Mittel で治療しなかつた

四股冷感が Kallikrein 投与 (6 Tab × 10 日) で Serverity 0 になつた 1 例があつた。

52. 輪状尿道脱の 2 例

山口隆久

外尿道口より尿道粘膜の翻転脱出したものを尿道脱といい, 比較的稀に見る疾患であり, 本邦における報告例も未だ 100 例を数えるに過ぎない。私は最近完全輪状尿道脱の 2 例を経験した, 2 例とも 7 才の小女で, 共に家族歴, 既往歴に特記すべきことなく, 突然, 外陰部疼痛, 出血, あるいは排尿時疼痛, 尿意頻度を訴え, 陰前庭外尿道口部に示指頭大, または拇指頭大の暗赤色, 柔軟な腫瘤を認め, 触診により疼痛激しく, ネラトンカテーテルの挿入により採尿することが出来, かつ腫瘤の下方に圧排された陰入口を認めた, 完全輪状尿道脱と診断し, 直ちに入院, 治療を行つた。治療法はトリクロールエチレン麻酔を用い, フリッチュ氏結紮法施行し, 両例とも術後排尿障害その他の異常も認めず, 完全に治癒せしめ得た。

53. 子宮頸癌統計報告 (第 4 報)

御園生雄三, 田中 稔

1954 年より 1957 年迄千大産婦人科教室における子宮頸癌患者 537 名の中, I 期 23.5%, II 期 33.9%, III 期 38.7%, IV 期 3.9% で以前の教室の報告に比べ (I + II) 期が増加, (III + IV) 期が減少の傾向にある。年令分布は 46~50 才がピーク, 続いて 41~45 才である。初発徴候としては性器出血が 82.3% と大部分で, 初発徴候発来後 1 カ月以内に来院したものの 5 年生存率は 52.7%, 1~3 カ月以内では 48.6%, 3~6 カ月以内では 34.0%, 6 カ月~1 年以内では 28.3%, 1 年以上では 20.0% と減少していくのは来院迄の期間と予後との間に早期受診の重要性が見出される意味で興味深い。

治療成績は I 期 78.2%, II 期 47.2%, III 期 17.3%, IV 期 0% であつた。

54. 帝切の適応について

御園生雄三, 古川金次郎

分娩は時々刻々その相に変化があり, 種々の要素が錯綜し, 多様の因子が混入するのでその動的実態を把握し, 予後を判定することは極めて困難である。帝切の医学的適応については成書に明記してあるが, 近時抗生物質, 化学療法の発達, 麻酔および